

福井市自立支援協議会　こども部会　課題提起シート

課題	<p>強度行動障害の状態が改善するには、コミュニケーションスキルの向上（理解・表出共に）が必要といわれている。コミュニケーションスキルとして、「聞く・話す」以外の手法の活用が有用とされ、自発的な表出を促すことが必要。</p> <p>教育では「聞く・話す」というスキルの向上を目指すことが多い。「聞く・話す」ができていても視覚的支援がより有用であり「聞く・話す」以外のスキルの活用の必要性を教育にわかっていただく必要である。</p>
概要及び現状	<p>【概要】学齢期に学校では口頭指示での理解、口頭（ことば）での表出スキルの向上が求められることが多い。幼児期や福祉サービスの場面ではスケジュールや手順表の使用といった理解のための視覚的支援、自発的表出の手段として PECS やおめめどうTMのグッズ等を使用していることが多い。</p> <p>しかし、学校では基本は口頭での指示を理解し、口頭での表出を求められることが多い。「聞く・話す」というスキルではコミュニケーションが不十分であるために、友人とのトラブルや行き渋りがみられることがある。口頭以外の書いてのやりとり等のアドバイスし使用することで状況が好転する例が多い。</p> <p>【現状】特セ等の研修は希望者のみを受ける形であるため特別支援教育が専門でない教員全体にコミュニケーション支援についての知識（視覚的支援や構造化の必要性）が普及しづらい。</p>
改善の方針	<p>自閉症スペクトラムの特性を持つ児のコミュニケーション支援としては①口頭でのやりとりだけではなく、視覚的支援を理解・表出ともに用いること、②理解のためには環境整備が必要と一般の教員の方にも知っていただく。</p>
具体的な取組内容	<p>【取組内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉・医療での事例や保護者の発言を伝える場をつくる。 （2022 支援学校校長会で「療育センターで保護者からお聞きすること」として伝えた） ・希望者だけでなく、学校全体対象に発達障害支援についての研修を実施する。 発達障害についての基礎知識をもつ（オンデマンドの活用等も考える） ・福祉で開催されている『強度行動障害の研修』の内容を教育が知る （教育関係者も受講できる仕組みを作る） ・冰山モデル、ABA についての事例検討研修を開催する。 （小児科医会（スクラム福井の事業）を活用する） ・各学校のスクールカウンセラーの役割・活用に発達障害の啓発を含める。
期待される効果	<p>【効果】</p> <p>学校でのトラブルが減る（問題行動、友人とのトラブル、行き渋り等） 卒後の強度行動障害といわれる症状を持つ方を減らせる。 ⇒卒後の行き場所が見つかる。</p>